

「莊騷」の誕生

——韓愈における文學としての『莊子』の受容——

鈴木 達 明

目次

はじめに

- 一 韓愈の「莊騷」併稱例
 - 二 韓愈の莊子受容
 - 三 韓愈の屈原受容
 - 四 韓愈による莊子評價の特徴
- おわりに

はじめに

「莊騷」は、『莊子』と屈原の辭賦との併稱であり、類語として「莊屈」がある。一般にこの併稱は中唐の韓愈に始まる^①とされ、晩唐以降、文學批評を中心に廣く見られるようになる^②。更に明末清初においては、兩者の精神性が明の遺臣たちに尊崇され、文學批評を超えて「莊屈」の合一が盛んに論じられた^③。一方で、散文と辭賦という文體の差違や、莊周と屈原との行跡の對照性など、兩者には併稱として不適切と見られる要素も多く存在する^④。^⑤

「莊騷」に關する先行研究は少なくないが、ほとんどがこの併稱を所與のものとして、兩者の共通性を探るものであつて、兩者が併稱されるに至つた理由については、未だ十分に解明されているとは言えない⁶⁾。本論は、韓愈の詩文に見える莊子と屈原の人物・作品への言及を通して、「莊騷」併稱の誕生の理由と意義について考察するものである。

なお「莊騷」と「莊屈」には、嚴密に言えば作品と作者のいずれに注目するかという區別があるが、論述の都合上、以下では「莊騷」の例も含めて、「莊騷」と總稱する。

一 韓愈の「莊騷」併稱例

韓愈の詩文における「莊騷」の併稱は、多數の列擧の中に含まれるものも含めると、文では「進學解」と「送孟東野序」、詩では「山南鄭相公樊員外酬答爲詩其末咸有見及語樊封以示愈依賦十四韻以獻」に見られる。まずはそれらの例を見てみよう。⁷⁾

「進學解」(卷二)は新・舊『唐書』の韓愈傳にも引かれ、早い時期から韓愈の代表作と見なされていた文である。元和七年(八一二)頃の作とされ、韓愈自身の投影である「國子先生」とその門人の對話篇であるが、その中で「先生」の文章に對する評價に「莊騷」併稱が見られる。

沈浸醲郁、含英咀華。作爲文章、其書滿家。上規姚姒、渾渾無涯、周誥・殷盤、佶屈聱牙、春秋謹嚴、左氏浮誇、易奇而法、詩正而葩。下逮莊騷、太史所錄、子雲相如、同工異曲。先生之於文、可謂闕其中而肆其外矣。(先生は馥郁たる香りを漂わせる文章の中に没入し、その中の精華を味わっておられる。文章を作り、家の中はその著書に満ちている。模範とされるのは、上は舜や禹の書の、廣々として果てが知れぬもの、周の諸々の「誥」や殷の「盤庚」の、ぎくしゃくごつごつとしたもの、『春秋』の慎ましい嚴格さ、『左氏傳』の大仰な派手さ、『易』の奇異ではあつても道理に合ひ、『詩』の正統的ながらも華やかさま。下は『莊子』と屈原の辭賦、司馬遷の記録、揚雄や司馬相如、それぞれ演奏は同じく巧みながら曲調は異なるものに廣く

及んでおられる。先生は文學については、中身はひろびろとして外形は自由奔放と言えますね。

〔送孟東野序（孟東野を送る序）（巻一九）は、貞元十七年（八〇二）から十九年の間に作られたとされる。物は均衡状態を失った時に音を發するものであり、人間においては文學がそれに當たるとする、著名な文學論である。その中で各時代の「善鳴者」を列舉する中に、莊子と屈原が隣接して取りあげられる。これも併稱の一種とみなすことができる。〕

周之衰、孔子之徒鳴之。其聲大而遠。傳曰、天將以夫子爲木鐸、其弗信矣乎。其末也、莊周以其荒唐之辭鳴。楚大國也、其亡也以屈原鳴。臧孫辰孟軻荀卿以道鳴者也。楊朱墨翟管夷吾晏嬰老聃申不害韓非魯到田駢鄒衍口佼孫武張儀蘇秦之屬、皆以其術鳴。（周が衰えると、孔子の學派が鳴った。その音は大きく遠くまで届いた。傳に「天は夫子を木鐸にしようとしている」というのは、その通りではないか。その末期には、莊周が「荒唐の辭」によって鳴った。楚は大國であったが、その滅亡に際しては屈原によって鳴った。臧孫辰・孟軻・荀卿は儒教の道によって鳴った人々である。楊朱・墨翟・管仲・晏嬰・老聃・申不害・韓非・慎到・田駢・鄒衍・口佼・孫武・張儀・蘇秦のような者たちは、みなその學術によって鳴った。）

〔山南鄭相公樊員外酬答爲詩其末咸有見及語樊封以示愈依賦十四韻以獻〕（山南の鄭相公・樊員外 酬答して詩を爲り其の末に咸な及ばるる語有り、樊封して以て愈に示す。依りて十四韻を賦し以て獻す）（巻七）は、元和十年（八一五）ごろの作とされる。韓愈と親交のあった山南西道節度使の鄭餘慶が、副使で韓愈に師事した樊宗師と唱和詩を作ったが、兩者いずれの作にも韓愈に言及した語があった。その返禮として二人に向けて作った詩であり、前半で鄭餘慶の儒教振興をたたえ、後半で鄭餘慶と樊宗師の唱和詩を褒める。用例はその末尾に見える。

25 如新去聆聽 新たに聆聽を去りて

26 雷霆逼颺颺 雷霆 颺颺に逼るが如し

27 綴此豈爲訓 此を綴りて豈に訓と爲らんや

28 俚言紹莊屈 俚言 莊屈を紹ぐ

引用部分では、二人の詩を讀んで耳垢をとったばかりの耳に雷霆や疾風を聞くような衝撃を受けた、返事としてこの詩を綴ったが、どうして「訓」（おしえ）となり得ようか、せいぜいわが卑俗な言葉は「莊屈」を繼ぐ程度である、と謙遜している。

以上の三つの用例に共通することは、いずれも莊子と屈原の文章に注目した併稱ということである。思想性や人間性と完全に切り離しているわけではないにしても、それらは前面に出ていない。これは、こと『莊子』について言えば、従来と異なる新しい受容のかたちと言えるものであつた。次章にてそれを確認しよう。

二 韓愈の莊子受容

漢代以來、『莊子』が道家思想及び道教の重要なテキストとして受容されてきたことは、改めて言うまでもない。文學の面でも、齊物や物化の思想、神仙や真人など超俗の人物類型、そして何よりもその寓話は、絶えず文人達に影響を與え、利用されてきた。ただ、本論で注目したいのは、それら思想やモチーフの吸収とは異なる、『莊子』のテキスト自體の修辭や文體に對する評價である。その最も早い例は、『莊子』天下篇に見ることができ（續古逸叢書本『宋刊南華真經』を底本とする）。

莊周聞其風而悅之、以謬悠之說、荒唐之言、无端崖之辭、……以卮言爲曼衍、以重言爲眞、以寓言爲廣。……其書雖瓌璋而連玃无傷也。其辭雖參差而諷詭可觀。（莊周はその古えの道術者の教えを聞いて喜び、どこまでもとりとめのない説、廣くつかみ所のない言、際限のない言葉をあらわして、……「卮言」によって「道」の窮まりない變化に合わせてどこまでも廣がり、「重言」によってその眞實をさとらせ、「寓言」によってその内容を押し廣げた。……その書は常識を超えるものだけでも、圓轉しており事物を傷つけることはない。その言葉はふぞろいであるが、奇異さには見るべき點がある。）

『史記』老子韓非列傳（中華書局點校本二十四史修訂本）の「大抵率寓言也」（おおむね寓言である）や「善屬書離辭、指事

類情」(文章を綴り言葉を聯ね、事物を述べ比喩を用いるのに巧みであった、「其言沈洋自恣以適己」(その言葉は果てがなく自ら思うがままであった)なども文章に對する評價である。以下に擧げるのは六朝から初唐にかけての、『莊子』の文章に對する評價の例である。

郭象「莊子序」(劉文典『莊子補正』、安徽大學出版社・雲南大學出版社、一九九九年。日本高山寺藏舊鈔本に基づく排印)

莊子閎才命世、誠多英文偉詞、正言若反。(莊子は偉才として世に知られ、まことに多くの優れた文辭を残した。眞に正しい言葉は普通とは反對のようだ。)

皇甫謐『高士傳』卷中・莊周傳贊(古今逸史本)

莊周傲世、沈洋寓言。文窮萬妙、學守一玄。(莊周は世人を見下し、果てのない寓言を述べた。その文章はあまたの美善を盡くし、その學問は玄なる一つの道を守った。)

『文心雕龍』諸子(詹鍇『文心雕龍義證』、上海古籍出版社、一九八九年)

逮及七國力政、俊父蜂起。孟軻膺儒以磬折、莊周述道以翱翔。(戰國の七國が力の政治を進めると、俊才が次々と出てきた。孟軻は儒家の教えを守って敬虔に振る舞い、莊周は道家の道を述べて悠々と飛翔した。)

『文心雕龍』情采(詹鍇『文心雕龍義證』)

研味孝老、則知文質附乎性情。詳覽莊韓、則見華實過乎淫侈。(『孝經』と『老子』を検討玩味すると、文と質は作者の本性や感情に關わることがわかり、『莊子』と『韓非子』を詳細に讀めば、裝飾と實質の關係が亂れた奢侈へと流れることがわかる。)

成玄英「南華眞經疏序」(古逸叢書本『南華眞經注疏』)

其言大而博、其旨深而遠。(その言葉は大きくて該博であり、その内容は深くまた遠くに及ぶ。)

ただ、これらはむしろ例外的であって、道家思想の隆盛を背景に『莊子』が大いに讀まれた六朝期においても、『莊子』の受容は思想に對するものがほとんどを占めていた。唐代に入ってもその状況は變わらない。七世紀前半に編纂された正

史に見える文學論として、『晉書』文苑傳序及び史臣の論、『梁書』文學傳序、『陳書』文學傳序及び史臣の論、『北齊書』文苑傳序、『周書』王褒庾信傳論、『隋書』文學傳序及び史臣の論があり、その他に個人の書簡や別集・總集の序文などの中にも文學論としての性質を持つ文章が多くあるが、『莊子』が文學史的な記述の中で位置づけを與えられる例は、管見の限りでは次の『周書』の例を除いて見当たらない（『北史』文苑傳序は『周書』をほぼそのまま引き寫す）。併稱の相手である屈原の辭賦が、毀譽褒貶はあれ、文學論の多くで言及されるのとは對照的である。

『周書』王褒庾信傳論（中華書局點校本二十四史）

逮乎兩周道喪、七十義乖。淹中稷下、八儒三墨、辯博之論蜂起、漆園黍谷、名法兵農、宏放之詞霧集。雖雅誥與義、或未盡善、考其所長、蓋賢達之源流也。其後逐臣屈平、作離騷以敘志、宏才豔發、有惻隱之美。（西周・東周の道が失われると、孔子の弟子たちの學説はばらばらになった。曲阜の淹中や齊の稷下では、儒家の八派や墨家の三派など、該博な辯論が蜂のように群がり起り、莊子や鄒衍、名家・法家・兵家・農家など、廣く奔放な言葉が霧のように集まった。これらは、經典の雅正な訓告文が持つような深い含意には至っていないが、その優れたところを考えれば、賢人達人の水源とその流れであると言えよう。その後故國を追われた屈平は、「離騷」を作ってその志を述べ、豊かな才能が鮮やかに發揮され、悲しみの美しさを持った。）

確かにここでは、莊子が文學の流れの中に位置づけられているように見える。ただ、對となるのが鄒衍（「黍谷」はその住處とされる場所）であり、竝べられているのが名家・法家・兵家・農家などの學派であること、そして「蓋賢達之源流也」という評價からは、「辯博之論」の一つとしての學術的な評價が中心であることが明らかであり、少なくとも「屈平」以下の辭賦の作者達（下文では宋玉・荀子・賈誼が、『詩經』の道を繼ぐ辭賦の作品の冠と稱えられている）のような、作者個人の文學性は認められていない。

詩文一般を見ても、『莊子』の寓話の利用は枚擧にいとまがないものの、その作者として文學性や巧拙を評價したり、

『莊子』のテキストの文章表現を評價したりするものはほとんどない。

人物としての莊子（莊周）について、韓愈以前の唐代の詩文における莊周像は、出仕を拒絶し微官に身を置いた隱逸者、道家の思想家、寓話中の登場人物（寓話の作者）、の三種類にほぼ限定される。寓話の登場人物と寓話作者を一括りにしたのは、それが不可分な場合が少なくないためである。

それぞれの例を見てみよう。

王維「輞川集 漆園」〔王維集校注〕卷五、中華書局、一九九七年〕^①

1 古人非傲吏 古人 傲吏に非ず

2 自闕經世務 自ら經世の務を闕く

3 偶寄一微官 偶たまたま一微官に寄せ

4 婆娑數株樹 數株の樹に婆娑たらん

杜甫「將適吳楚留別章使君留後兼幕府諸公得柳字（將に吳楚に適かんとして章使君留後兼幕府諸公に留別す 柳字を得）」〔宋

本杜工部集〕卷四〕

29 中原消息斷 中原消息斷たれ

30 黃屋今安否 黃屋 今安きや否や

31 終作適荆蠻 終に荆蠻に適くを作し

32 安排用莊叟 排に安んずること莊叟を用いん

盧照鄰「失羣鷹（群を失える雁）」〔盧照鄰集校注〕卷二、中華書局、一九九八年〕

13 唯有莊周解愛鳴 唯だ莊周有り 解よく鳴くを愛す

14 復道郊歌重奇色 復た道う 郊歌奇色を重んずと

李白「古風」其九（『李太白全集』卷二、中華書局、一九九九年）

1 莊周夢胡蝶 莊周 胡蝶を夢み

2 胡蝶爲莊周 胡蝶 莊周と爲る

3 一體更變易 一體 更こもも變易し

4 萬事良悠悠 萬事 良に悠悠たり

獨孤及「得柳員外書封寄近詩書中兼報新主行營兵馬因代書戲答（柳員外の書を得るに、封じて近詩を寄せ、書中兼ねて新主の行營兵馬を報ず、因りて書に代えて戯れに答う）」（『毘陵集』卷三、四部叢刊本）

3 說劍嘗宗漆園吏 劍を説くに 嘗て漆園の吏を宗とし

4 戒嚴應笑棘門軍 戒嚴 應に棘門の軍を笑うべし

楊炯「庭菊賦序」（『楊炯集箋注』卷一、中華書局、二〇一六年）

駱縝則詰訓之前識、張相則老莊之後英。（駱縝は詰訓の學問での先驅者であり、張相は老莊の學問での後生の英雄である。）

張說「與鄭駙馬書（鄭駙馬に與うる書）」（『唐文粹』卷八三、四部叢刊本）

晚尋莊周書、以天地爲國、道德爲身。（遅まきながら莊周の書を読んで、天地を國とし、道德を體とするようになった。）

楚の威王からの仕官の誘いを斷つたという傳記に基づき、郭璞「遊仙詩」が「漆園有傲吏」と描いて以來、「傲吏」は莊子の代名詞となる。王維の詩はそれをひねり、莊子が誘いを斷つたのは威張っていたからではなく、自分から治世に關わる職を避けたのだ。自分もそれにならつて微官に身を置いて樹下にゆつたりしようという（あるいは全て莊周のことをいうとも讀める）。ここでの莊子は世間に惑わされず隱逸の生活を送る理想的人物である。

杜甫の詩は、戰亂を避けて南へ赴くことを詠んだ王粲「七哀詩」を第31句で踏まえ、その南方の地で、莊子のような安逸の生活を送ろうという。「安排」は『莊子』大宗師篇に出る術語で、自然の推移に安んずること。杜甫は「寄岳州賈司

馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻（岳州の賈司馬六丈・巴州の嚴八使君兩閣老に寄す五十韻）（卷一〇）でも、賈至と嚴武の左遷を慰めて「安排求傲吏、比興展歸田」（安排 傲吏を求め、比興 歸田を展ぶ）と詠んでいる。どちらも理想的隱逸者としての莊子である。

盧照鄰の詩は、『莊子』山木篇を踏まえる。莊子が友人の家でもてなしを受けた時、鳴き聲のよくない「不材」の雁の方がつぶされてしまった。逆に「材」であるために伐採される木の境遇と對比して「材」と「不材」の差違も結局は相對的であることをいう寓話である。李白の詩は齊物論篇の「胡蝶の夢」を踏まえる。獨孤及の詩は說劍篇を踏まえ、軍事の心得が十分にあることをいう。この三例に共通するのは、取りあげられる寓話が、全てともと登場人物として莊子が登場するものであるということである。これは、この時期の詩文で、『莊子』の寓話を用いる時に人物としての莊子にも言及する例の大半に、共通して見られる特徴である。この場合、莊子が寓話の登場人物であるのか、その作者であるのかという區別は、極めて曖昧模糊としたものとなる。

楊炯の序文、張説の書では、いずれも莊子を道家の思想家として捉えている。詩に描かれる莊子が「傲吏」に代表される隱遁者像に傾くのに比べ、文の場合は、道家の思想家の姿がより多く見える傾向があるが、先述の三類型に限定されることは文・詩とも變わりがない。

續いて特に莊子の著述に言及する例を見ておこう。

崔行功「贈太師魯國孔宣公碑」（『全唐文』一七五）

若其聃語棄智、則聖非攘臂之端。莊寄齊諧、則禮必因心之範。（老聃が智を捨てることを説けば、聖人は袖をまくって無理矢理人を動かすふるまいの端緒であると批判し、莊子が齊諧を寄せると、禮は仁愛の心を規範とせねばならぬという。）

楊炯「瀘州都督王湛神道碑」（『楊炯集箋注』卷八）

莊周著論、生也若浮。史佚立言、歿而不朽。（莊周は論を著したが、生きているときは流れに浮かぶようになるがままであつ

たし、史佚は立派な言説を述べて、亡くなってもその言葉は不朽となった。⁽¹²⁾

盧藏用「答毛傑書（毛傑に答うる書）」（『全唐文』二三八）

覽莊生鷗鵬之喻、則乾坤龍馬之旨可好矣、培風運海、則六九之源無差矣。（莊子の鯤と鵬の比喩は、天地の法則の内容を知るのによく、風に乗り海がうねるといふ寓話は、陰陽の根源を正しく理解させます。）⁽¹³⁾

蕭穎士「聽早蟬賦（早蟬を聽くの賦）」（『文苑英華』一四一）

莊篇載狗婁之志、孔氏感螳螂之捕。（莊子の篇籍には狗婁者の志を書き、孔子は螳螂の狙いの戒めに感じる。）⁽¹⁴⁾

王維「薦福寺光師房花藥詩序」（『王維集校注』卷八）

漆園傲吏、著書以稗稱爲言。蓮座大仙、說法開藥草之品。（漆園の傲吏は、書を著してヒエの話をし、⁽¹⁵⁾蓮華座の御佛は、佛法を説いて藥草の篇章を開いた。）

李嘉祐「送韋司直西行（韋司直の西に行くを送る）」（『文苑英華』二二八）

7 能文兼證道 文を能くし兼ねて道を證す

8 莊叟是前身 莊叟は是れ前身

以上はいずれも、寓話や論者の作者として莊子や、書物としての『莊子』に言及した例ではある。だが、そこで注目されているのは、あくまでその内容や思想であって、文章自體に注目し、⁽¹⁶⁾評價を與えているものではない。⁽¹⁷⁾蕭穎士や王維の文で言及される寓話が、いずれも莊子を登場人物とするものであるのも、先に見た傾向と同じである。

作者としての莊子に言及して、明確にその文章表現を評價する例は、管見の限りでは、李白の「大鵬賦」（『李太白全集』卷一）のみである。

南華老仙、發天機于漆園、吐崢嶸之高論。開浩蕩之奇言、徹至怪於齊諧。（南華の老仙は、天賦の機知を漆園にて發現し、そびえ立つほどの高尚な論を口にした。際限なく廣がる奇言を開陳し、怪異の記録（至怪）は「志怪」の誤りとする）を齊諧の

話によって證據づけた。

このような状況において、韓愈が文學性を有する作者として莊子を捉え、その文章を評價したことは、劃期的なことであつたと言える。

韓愈の莊子受容について、もう少し踏み込んでみてゆこう。韓愈も『莊子』の寓話のモチーフは大いに利用しているが、直接莊子に言及した詩文は多くない。「莊騷」併稱の例以外には、詩では「贈崔立之」「落齒」の二例、文では「答渝州李使君書」「送區册序」「送王秀才序」「唐故檢校尚書左僕射右龍武軍統軍劉公墓誌銘」「唐故朝散大夫尚書庫部郎中鄭君墓誌銘」の五例がある。このうち「唐故檢校……劉公墓誌銘」(卷二九)の例は、「大父巨敖、好讀老子莊周書(祖父の巨敖は老子と莊周の書を讀むのを好んだ)」と、他者の愛好を記すものであつて、韓愈の莊子受容を讀み取る材料とはしがたい。以下これを除いて考察を進める。

まず「贈崔立之(崔立之に贈る)」詩(外集卷二)は、作者としての莊子の受容を明確に示す例として重要である。全文を引く。

- | | | |
|---------|-------------------------|-----------|
| 1 昔者十日雨 | 昔者 | 十日の雨 |
| 2 子桑苦寒飢 | 子桑 | 寒飢に苦しむ |
| 3 哀歌坐空屋 | 哀歌して | 空屋に坐し |
| 4 不怨但自悲 | 怨まず | 但だ自ら悲しむ |
| 5 其友名子輿 | 其の友 | 名は子輿 |
| 6 忽然憂且思 | 忽然として | 憂い且つ思ふ |
| 7 裳裳觸泥水 | 裳を裹 <small>か</small> けて | 泥水に觸れ |
| 8 裹飯往食之 | 飯を裹 <small>つ</small> みて | 往きて之に食らわす |

- 9 入門相對語 門に入りて相い對して語れば
 10 天命良不疑 天命 良に疑わず
 11 好事漆園吏 好事 漆園の吏
 12 書之存雄辭 之を書きて雄辭を存す
 13 千年事已遠 千年 事は已に遠きも
 14 二子情可推 二子 情は推すべし
 15 我讀此篇日 我 此の篇を讀みし日
 16 正當雨雪時 正に雪雨ふるの時に當たる
 17 吾身固已困 吾が身は固より已に困ず
 18 吾友復何爲 吾が友は復た何をか爲さん
 19 薄粥不足裹 薄粥 裹むに足らず
 20 深泥諒難馳 深泥 諒まことに馳せ難し
 21 曾無子輿事 曾て子輿の事無し
 22 空賦子桑詩 空しく子桑の詩を賦さん

前半十句では『莊子』大宗師篇の寓話を述べる。⁽¹⁸⁾ もとの寓話は貧窮を運命として受け入れることが主題であるが、ここでは苦しむ友人を案じて食べる物を運んだ友情に焦點を當てている。第11句から14句では、「漆園吏」すなわち莊子がこの寓話を「雄辭」に残し、それによって千年前の子桑と子輿の友情が、今の自分にも推し量れるという。第15・16句では自らの『莊子』讀書體驗に思いを致し、自分と友人崔立之の身の上に引きつけ、末尾では子輿ならぬ崔立之は心配して來てくれることもなからうから、自分はむなしく子桑が歌ったように詩を作るだけだとすねてみせる。

ここで韓愈が用いる大宗師篇の寓話には莊子が登場しない。第11・12句でも、韓愈は明確に莊子を寓話の外側にいる作者として捉え、第15・16句では自分自身をその讀者として描く。これは寓話の作者と登場人物との區別を曖昧にしたままに莊子を扱っていた従來の詩文とは決定的に異なる態度である。更に言えば、前半十句を一つの故事の描出に當るといふ、詩として特異な表現は、莊子の「雄辯」に對する韓愈の高い評價をうかがわせる。

詩でのもう一つの用例は、諧諷的に自らの老いを歌う「落齒」(卷四)の中に見える。

25 人言齒之落 人言う 齒の落つるや

26 壽命理難恃 壽命 理として恃み難しと

27 我言生有涯 我言う 生に涯かぎり有り

28 長短俱死爾 長短 俱に死するのみと

29 人言齒之豁 人言う 齒の豁たるや

30 左右驚諦視 左右驚き諦視せんと

31 我言莊周云 我言う 莊周云わく

32 木雁各有喜 木雁 各おの喜ぶところ有り

第29句から32句では、齒抜けになつたら周りがじろじろ驚き見ると人は言うが、私に言わせれば、材と不材どちらが吉と出るかわからないように、齒の有る無しどちらが幸いかはわからない、という。盧照鄰「失群鴈」詩と同じ『莊子』山本篇の寓話をふまえたものだが、「莊周云わく」と直接話法的に述べるのは、まさに「以文爲詩」(散文のように詩を書く)と評される韓愈らしい手法である(但し第32句は『莊子』の中にそのまま見える文言ではない)。また第27句も、『莊子』養生主の「吾生也有涯、而知也无涯」(私の生命には限りがあるのに知には限りがない)を踏まえた表現である。

ここでは、格言のように『莊子』を引くことに注目したい。諧諷的な詩であり、老衰の悲しみの相對化に道家の思想を

参照するのも習見であつて、この詩のみで韓愈の莊子評價を論じるのには不十分だが、散文での莊子の言及においても類例が見えるので、併せて考えよう。

「答渝州李使君書（渝州の李使君に答うる書）」（卷一八）

莊子云、「知其無可奈何而安之若命者、聖也。」傳曰、「君子埃命。」（莊子は「人にはどうしようもないことであると理解して、安んじて運命として受け入れる人は、聖人だ」といいますし、經典の傳にも「君子は運命を待つ」といいます。）

「送區册序（區册おうさくを送る序）」（卷二二）

莊周云、「逃空虚者、聞人足音蹙然而喜矣。」況如斯人者、豈易得哉。（莊周は「人跡絶えたところに世を逃れた者は、コツコツという人の足音が聞こえただけで喜ぶものだ」といいます。ましてこのような人にはめつたに會えないのですから、なおさら嬉しいのです。）

これらはいずれも『莊子』を格言として引く例である。「答渝州李使君書」では、韓愈を頼りにして來た相手に對し、今すぐには應えられないことを詫びつつ、相手を慰めてこのように言う。『莊子』は徳充符篇の申徒嘉・子産問答の「知不可奈何而安之若命、唯有徳者能之」、「傳」は『禮記』中庸の「君子居易以俟命」（君子は平らかな場に身を置いて運命を待つ）に基づくが、『莊子』では「唯有徳者能之」（有徳者だけにできることだ）とあるのを「聖也」と改めている。原文では道家的な「徳」を供えた人物を指すが、「有徳者」自體は多義的であるので、斷章取義でそのまま引いても通じるところを、敢えて儒家的價值に直結するように改めている。これは韓愈の「道」や「徳」などの語に對する慎重さとともに、莊子に對する理解を示すものと言えよう。「送區册序」の方は、徐无鬼篇の寓話を用い、陽山左遷中に尋ねてきてくれた區册への喜びを表すもので、同様の用例は柳宗元にも見られ、⁽¹⁹⁾ 特異性は見られないが、少なくとも批判的な引用ではない。

韓愈の詩文において、⁽²⁰⁾ 出典を示し、「云」「曰」などを用いて經典や古人の言を引く例は、經典や孔子・孟子を除くと、揚雄と莊子のみである。詩と合わせても三例のみではあるが、そこに『莊子』のテキストに對する韓愈の尊重を見ること

は許されよう。

ところで「尊重」というならば、韓愈の佛・道批判とは矛盾しないのだろうか。

韓愈が「佛老」「釋老」を批判する例は枚擧にいとまがないが、そこで道家を代表するのは常に「老」であって、「莊」が並べられるのは、次の一例のみである。

〔送王秀才序（王秀才（頃）を送る序）〕（卷二〇）

故學者必慎其所道、道於楊墨老莊佛之學、而欲之聖人之道、猶航斷港絕潢以望至於海也（だから學問をするものは、どの道をたどるかに慎重でなくてはならない。楊・墨・老・莊・佛の學問をたどって、聖人の道に進もうとしても、それはまるで出口のない港や海から切り離された池に舟を浮かべて海へと至ろうとするようなものである）。

この例は「楊墨」も含めた異學の總稱の中に「莊」が含まれるものであり、「佛老」「釋老」の「老」のように、道家の代表としての扱いとは異なると言える。

佛・道批判として擧げられるのが常に「老」であることは、韓愈の意識の中で、道家の中でも批判の対象となる要素と結びつくのが老子であったことを示している。そもそも韓愈の佛・道批判は、その思想や教義の内容のみならず社會經濟や風紀への悪影響に對しても向けられたものであった。²¹特に道家については、迷信の蔓延による社會や家族關係の崩壊が批判の中心であったとされる。それらの要素は神仙説や宗教としての道教などと關聯が深いが、韓愈にとつて特に老子との關係が強く意識されていたことは、「送張道士序（張道士を送る序）」（卷二二）で、批判的な文脈ではないものの、道士として出家することを「寄迹老子法中、爲道士（老子の教えに身を託し、道士となった）」と表現していることから裏付けられる。

韓愈が老・莊を一體のものとして見ていなかったことは、他者の趣向について言う「唐故檢校……劉公墓誌銘」を除き、「老莊」二者の併稱が見られないことにもうかがえる。²²それでは、韓愈はいつたい何を基準として老・莊を區別していた

と考えられるのだろうか。

「孟東野を送る序」では、老子は「其の術」によって「鳴」いた數多の諸子の一つとして扱われ、莊子とは明確な差が附けられている。他に「與馮宿論文書（馮宿に與えて文を論ずる書）」（卷一七）でも、『老子』の文章に對する韓愈の低い評價をうかがわせる記述がある。この文では、文章の價值が他人には理解されないことについて、揚雄の『太玄經』がふさわしい評價を得られなかった逸話を例として次のように述べる。

其時桓譚亦以爲雄書勝老子、老子未足道也、子雲豈止與老子爭彊而已乎。此未爲知雄者。其弟子侯芭頗知之、以爲其師之書勝周易。然侯之他文、不見於世、不知其人果如何耳。（當時、桓譚もまた「揚雄の書は『老子』に勝る」としたが、『老子』など言うに足らないものであり、揚雄はどうして『老子』程度と競争するに止まらうか。桓譚も揚雄の理解者とは言えない。弟子の侯芭というものはいくらか揚雄を理解していて、その師の書は『周易』に勝るとしたけれども、侯芭自身の他の文章は世にないので、彼がいったいどういう人物だったかはわからない。）

「老子未足道也」までを桓譚の考えとすることもできるが、いずれにしても韓愈は、揚雄の書が『老子』に勝るところか、そもそも『老子』と比較すること自体が不適當であると考えている。韓愈の揚雄への尊崇の度合いや、一方の比較對象が『周易』であることを差し引いても、韓愈の『老子』の文章に對する評價が高くないことは明らかである。

以上の例を見ると、韓愈における老・莊の區別は、その文章の評價における差違を反映したものであったと推測できる。更に言えば、韓愈にとつて莊子の思想性はそもそも評價の外側に置かれていたのではないかと疑わせる。莊子の思想に對する韓愈の評價がほとんど伝わっていないため斷言はできないものの、その不在こそが、かえって以上の推測を裏附けるように思われる。言い換えるならば、韓愈の目には、道家思想家としてではなく、文章家としての莊子のみが映っていたのではないか。「原道」（卷一）では、佛・道への強い批判を展開する中で、「聖人不死、大盜不止。剖斗折衡、而民不爭」（聖人が死ななければ、大泥棒はいなくならない。秤や天秤を打ち碎けば、民は争わない）という。これは『莊子』胠篋篇の

文だが、漠然と批判相手の言を指す「今其言曰」を用いて引かれている。筆者の推測が正しければ、護教的な立場からこの文を取りあげた時に、韓愈のイメージにおける莊子と結びつかなかったために、このような書かれ方となったと考えられる。

莊子への言及の例として最後に残った「唐故朝散大夫尚書庫部郎中鄭君墓誌銘」（卷三二）は、かつて同僚であった鄭群の長者然とした風度について「豈列禦寇莊周等所謂近於道者邪」（これこそ列禦寇や莊周のいう「道に近い者」ではないか）というものである。これは文章家でなく道家思想家として莊子に言及した例であり、ごく一般的な莊子の受容ではあるが、韓愈としては例外的と言えるものである。

三 韓愈の屈原受容

屈原とその文學の受容については、先行研究が多く存在する。⁽²³⁾ まずはそれらに基づき歴史的な受容状況を概観しておく。

漢代には既に淮南王劉安・王逸を代表とする肯定的評價と、揚雄・班固を代表とする否定的評價が存在していた。そのどちらも、屈原という人物の精神性と行動に對する倫理的な評價に基づくもので、前者は、諷諫と修辭の兩立したその作品は『詩經』をはじめとする經書に準じる理想的な文學であると評價した。⁽²⁴⁾ 後者では、班固が自らの才能をひけらかすこと、君主に對する過剰な批判、虚構への言及などの點が、法度や經書に背くものと批判したの⁽²⁵⁾に對し、揚雄は、諷諫を建て前⁽²⁶⁾にしながらも實際には一種の言語遊戯であつて教化には役に立たず、むしろ詩歌の墮落を招くものであることを批判した。⁽²⁶⁾ 以上の評價は、その後も屈原評價の論點の中心に座り續けた。

六朝期においては、裴子野「雕蟲論」や顔之推『顏氏家訓』などに否定的評價があるものの、おおむね肯定的な評價が中心を占めている。唐代にも大きな影響を與へた評價として、『宋書』謝靈運傳論（中華書局點校本二十四史）では、「周室

既衰、風流彌著、屈平宋玉、導清源於前、賈誼相如、振芳塵於後」(周王朝が衰えてから、詩歌の流れはますます明らかになり、先には屈平・宋玉が清らかな源流を前に導きだし、後には賈誼や司馬相如がかぐわしい美風を振るった)とされ、また漢から魏までの各時代の文人たちについて「原其飈流所始、莫不同祖風騷」(その流れのおおもとを尋ねると、全て『詩經』と『楚辭』を祖としている)というように『詩經』と並ぶ古代の理想の文學とされた。

前章に名前を挙げた唐初の正史の文學論の中では、『北齊書』文苑傳序及び『周書』王褒庾信傳論が肯定的に屈原・『楚辭』を取りあげている。²⁷⁾その他も直接の言及こそないが、漢・魏以前の辭賦に對して否定的に扱うものは見られない。

一方で、初唐四傑ら文人の中には、否定的な評價がまま見受けられる。王勃「上吏部裴侍郎啓(吏部裴侍郎に上る啓)」や盧藏用「陳伯玉文集序」では輕薄・淫亂な詩風の開始點として否定され、楊炯「王勃集序」や盧照鄰「駙馬都尉喬君集序」では、明確な批判こそないものの、「文」と儒家の「道」が一體であつた理想的時代からの變化・衰退の始點として位置づけられる。ここからは、屈原の文學への批判が、南朝風の詩風からの脱却と經學的價值觀の強化を背景として行われていることが讀み取れる。

屈原に對する否定的評價は、李華・蕭穎士・獨孤及・柳冕ら古文家の先驅者とされる人物たち(以下、「前古文家」と呼稱する)によつて更に展開される。²⁸⁾

李華「贈禮部尚書孝公崔沔集序」(『文苑英華』卷七〇二)

偃商歿而孔伋孟軻作、蓋六經之遺也。屈平宋玉哀而傷、靡而不遠、六經之道遯矣。(子游・子夏が亡くなると孔伋・孟軻が起こつた。それらは六經の遺産であろう。屈平・宋玉は哀しみで心を痛め、淫靡に流れて廣がらず、六經の道は隠れてしまつた。)

李華「揚州功曹蕭穎士文集序」(『文苑英華』卷七〇一)

君謂六經之後有屈原宋玉、文甚雄壯、而不能經。(六經の後に屈原・宋玉が出たが、文章は非常に雄壯であつたけれども、

〔經〕とはなり得ないと君（蕭穎士）は言った。

獨孤及「唐故殿中侍御史贈考功郎中蕭府君文章集錄序」（『毘陵集』卷一三）

嘗謂揚馬言大而迂、屈宋詞侈而怨。沿其流者、或文質交喪、雅鄭相奪。盍爲之中道乎。（君はかつてこう考えた。揚雄・

司馬遷は言葉は雄大だが迂遠であり、屈原・宋玉は豪奢だが怨みがこもっている。その流れに従うものは、文も質もともに失われ、正しい音楽も俗好みの音楽もともに無くなる。偏りのない中道の文を作らぬわけにはいかない、と。）

柳冕「與徐給事論文書（徐給事に與えて文を論ずる書）」（『唐文粹』八三）

自屈宋以降、爲文者本於哀豔、務於恢誕、亡於比興、失古義矣。（屈原・宋玉より後、文章をつくるものは悲愴の感情と艶麗な文辭に本つき、誇大と怪誕にばかりつとめ、『詩經』の比興に通じる技法は失われてしまい、古えの義理はなくなった）

初唐における批判が、主に南朝文學に繋がる艶麗な文辭に對するものであったのと異なり、前古文家においては、「哀」や「怨」の情感への偏りとその過剰が儒教的な文學の正しさと齟齬することに對する批判が強まっている。批判の中心が、揚雄的な批判から班固的な批判へと變化したと言換えることもできるかも知れない。

しかし韓愈・柳宗元に至ると屈原への否定的な評價は全く見られなくなる。韓愈におけるその理由については後ほど論じるとして、まず屈原に明示的に觸れた詩文を見てゆこう。

中唐期の主要な文人の多くが、場所や期間の違いはあれ、南方への左遷を體驗しており、彼らの屈原受容も、その體驗と關聯附けて論じられてきた。⁽³⁰⁾ 韓愈もまた生涯に二度、南方に左遷されており、特に貞元二十年（八〇四）から翌年にかけての陽山縣令への左遷に關わる詩の中で、多く屈原に觸れている。

〔湘中〕（卷九）

1 猿愁魚踊水翻波 猿愁え 魚踊りて 水 波を翻す

2 自古流傳是汨羅 古よ自り流傳す 是れ汨羅なりと

3 蘋藻滿盤無處奠 蘋藻 盤に滿つるも 奠そなうるに處無し

4 空聞漁父叩舷歌 空しく聞く 漁父の舷を叩いて歌うを

〔送惠師（惠師を送る）〕（卷二）

69 斑竹啼舜婦 斑竹 舜婦啼き

70 清湘沈楚臣 清湘 楚臣沈む

〔赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士（江陵に赴く途中、王二十補闕・李十一拾遺・李二十六員外翰林三學士に寄せ贈る）〕（卷二）

1 孤臣昔放逐 孤臣 昔 放逐され

2 血泣追愆尤 血泣 愆尤を追う

〔陪杜侍御遊湘西兩寺獨宿有題因獻楊常侍（杜侍御に陪して湘西の兩寺に遊び、獨宿して題する有り、因りて楊常侍に獻す）〕（卷二）

29 靜思屈原沈 靜かに思ふ 屈原の沈みしを

30 遠憶賈誼貶 遠く憶う 賈誼の貶せられしを

〔岳陽樓別竇司直（岳陽樓にて竇司直に別る）〕（卷二）

75 追思南渡時 追思す 南渡の時

76 魚腹甘所葬 魚腹 葬る所に甘んず⁽³¹⁾

〔晚泊江口（晚に江口に泊す）〕（卷九）

3 二女竹上淚 二女 竹上の淚

4 孤臣水底魂 孤臣 水底の魂

詩題	時期	詩型	人物
湘中	陽山往路	七言絶句	屈原・漁父
送惠師	陽山滞在中	五言古詩	屈原・湘妃
赴江陵途中……	陽山復路	五言古詩	屈原？
陪杜侍御遊湘西……	陽山復路	五言古詩	屈原・賈誼
岳陽樓別竇司直	陽山復路	五言古詩	漁父
晚泊江口	陽山復路	五言律詩	屈原・湘妃
會合聯句	回想	五言聯句	屈原・湘妃

「會合聯句」(卷八)

- 21 剝苔弔斑林 苔を剥ぎて斑林を弔い
 22 角飯餌沈塚 飯を角みて沈塚に餌す³²⁾

以上の詩について作成時期、詩型、取り上げられる人物を一覧にすると上の表のようになる。「湘中」は、貞元二十年(八〇四)の春に陽山に赴任する途中、汨羅に立ち寄った時の作。

『楚辭』漁父での、漁父と屈原との對話を踏まえ、自らの身の上を屈原に重ねた、典型的な逐臣(遠方に左遷された臣)の詩である。元和十二年(八一七)の作である「祭河南張員外文(河南張員外を祭る文)」(卷二二)でも「南上湘水、屈氏所沈、二妃行迷、淚蹤染林」(南に湘水を遡れば、屈氏の自沈したところであり、舜の二妃が歩き迷って、その涙の跡が林をまだらに染めている)と、このことが回想されている。次の「送惠師」は陽山滞在中の作ではあるが、これは名所舊跡を回りたいという惠師の發言を書いたものであり、韓愈自身の心情を反映するものではない。「赴江陵途中……」以下は、永貞元年(八〇五)、恩赦にあつて長安へと戻る途中に讀まれたものである。「赴江陵途中……」の「孤臣」は、直接は韓愈自身を指すが、屈原のイメージを讀み取ることも可能だろう。但し詩中で屈原の故事が更に展開されることはない。

陽山からの復路に詠まれた作品のうち、「陪杜侍御遊湘西……」と「岳陽樓別竇司直」は現地の有力者に獻じた詩であり、「湘中」や「晚泊江口」も近體詩であつて、交際のための、いわばよそ行きの詩としての性格を持つ。³³⁾

人物を見ると、屈原とともに湘妃に觸れるものが多いことが注目される。湘妃は舜の妃であつた娥皇と女英を指す。舜が南巡中に亡くなると、二人の妃も湘水のほとりで亡くなり、や

がて二人は湘水の神となったという傳説がある。⁽³⁾『楚辭』九歌の「湘君」「湘夫人」は、おそらくもとは舜の妃とは無關係の湘水の神へ向けた歌だったろうが、漢代以來、この舜の妃たちの傳説と合體して受け入れられてきた。「斑竹」は彼女たちの涙によって竹がまだらにそまったという張華『博物志』卷八に見える故事による。

彼女たちもまた、楚の地方における神秘的なモチーフとして唐詩に多く用いられた。その悲劇性の類似だけでなく、『楚辭』九歌と結びつけられる點で「屈原と並べて用いられることは決して不自然ではない。ただ例えば「屈・賈」の對が、不遇の逐臣の悲しみを直接的に、また現實的なものとして想起させるのに對し、湘妃と組み合わせられた屈原は、歴史上の人物としての輪郭線を弱め、『楚辭』の世界に存在する傳説中の人物としてのイメージを強く持つであろう。これは、屈原が「離騷」の靈均や「漁父」の登場人物と重ねられるように、傳説と現實の歴史にまたがった性質を持つ人物であることに起因する。附言すれば、韓愈の詩文で「屈・賈」の併稱が見えるのは、この「陪杜侍御游湘西……」一例のみである。

韓愈はこの湘妃傳説には強い興味を持っていたようで、元和十四年（八一九）に潮州に左遷された時には、途中の長沙で湘妃を祭った黃陵廟に祈りを捧げ、翌年許されて長安に戻る途中、廟の補修を願ひ出た上、「祭湘君夫人文（湘君・夫人を祭る文）」（卷三三）を書いて湘君・湘夫人を顯彰している。更に長慶元年（八二二）には、「黃陵廟碑」（卷三二）を書いてその傳説を考證し、同じ碑石に刻ませている。この際、屈原にも思いを致した作品があつてもよいはずだが、現存するのは次の詩の例のみである。

「量移袁州張韶州端公以詩相賀因酬之（袁州に量移せられ、張韶州端公 詩を以て相賀す、因りて之に酬ゆ）」（卷一〇）

3 北望詎令隨塞鴈 北望 詎ぞ塞雁に隨わしめん

4 南遷纔免葬江魚 南遷 纔かに江魚に葬らるるを免る

3 句目、雁は早春に北へと戻る渡り鳥であり、前漢の蘇武が故郷への思いを雁に託して以來、歸郷の思いを示す習用の

表現。4句目は『楚辭』漁父に出る（註（31）参照）。袁州への量移が認められた時、韶州刺史の張某から祝賀の詩をもらい、それに返した七言律詩であり、やはり交際の詩の性質を強く持っている。

自身の左遷と関わらない例としては、貞元十四年（七九八）に友人の孟郊が江南に旅立つに当たって、李翱を加えた三人で作った「遠遊聯句」での用例がある。詩題にも明らかのように、全體にわたって『楚辭』のイメージを用いながら歌われている。

「遠遊聯句」（卷八）

41 懷糈餽賢屈 糈しよを懷まきて賢屈おくに餽くり

42 乘桴追聖丘 桴ふに乘まりて聖丘を追おう

43 飄然天外步 飄然として天外あまに歩あむ

44 豈肯區中囚 豈あに肯まえて區中あまに囚とわれんや

「賢屈」は屈原、「聖丘」は孔子を指す。ここでは逐臣の哀しみよりも超俗の樂しみを歌う。むしろこの直後の孟郊の句の方が、典型的な逐臣としての屈原をイメージさせるものである。⁽³⁵⁾なお韓愈はこの聯句でも第19句から四句にわたり湘妃について詠んでいる。

以上の検討から、左遷體驗に關わる屈原の受容に關して、韓愈の態度は柳宗元や劉禹錫とは異なるものであったことがわかる。柳・劉が、左遷された悲劇の忠臣の理想像として屈原と自らを重ね合わせ、その境遇の相似性を通して大きな文學的影響を受けたの⁽³⁶⁾に對して、韓愈にとっては、逐臣としての屈原は、湘妃などと同じく、南方世界を描くのに缺かせないモチーフの一つではあったが、それ以上に特別な意味を持つものではなかった⁽³⁷⁾と思われる。

もちろん、「莊騷」併稱の例からも、韓愈が屈原の文學性に對して高い評價を與えていたことは確かである。ただ柳・劉の屈原評價が、自身の左遷體驗と切り離せないものであったのに對し、韓愈はそうではなかった。屈原の文學性につい

ての韓愈の記述が、左遷とは直接結びつかない作品の中にこそ見られるのは、その傍證となろう。

「感春（春に感ず）四首」其二（卷三）

11 近憐李杜無檢束 近ごろ憐れむ 李杜の檢束無く

12 爛漫長醉多文辭 爛漫として長えに酔い文辭多きを

13 屈原離騷二十五 屈原 離騷 二十五

14 不肯餉糟與醑 肯かすえて糟しると醑しるとを餉かすぜず

15 惜哉此子巧言語 惜しいかな 此の子 言語に巧みなるも

16 不到聖處寧非癡 聖處に到らず 寧ぞ痴に非ざらんや

元和元年（八〇六）に陽山から江陵府に移った時期の作とされる。陽山からの復路で屈原を詠んだ先述の諸詩の少し後、状況としてはなお復路の途中であり、萬物が生き生きとする春、憲宗の即位に際して活躍の場を與えられないことへの歎きが込められるが、直接左遷に觸れる記述はない。韓愈は最も早い時期に李白・杜甫を並べて高く評價した人物として知られるが、³⁸ここで屈原はその二人に並べられている。第15・16句は「言語に巧み」であっても、「聖處」たる醉つ拂いの境地に至らなかつたのはまことに愚かなことと惜しむ。第14句で酒粕や粕汁を食わなかつたというのは、『楚辭』漁父に基づく屈原の潔癖さを示す表現だが、本詩では酒に對する對照的な態度を示すのが主となつてゐる。氣ままに飲み續けて酩酊できた李・杜に對して、酒粕すら固辭せざるをえなかつた屈原は、根源的な悲劇性を帯びるものの、逐臣としての悲劇性は後退していると思われる。むしろこの詩では「屈原離騷二十五」と、作品名と合わせて示されることから、李・杜と並ぶ優れた作者としての屈原が強く意識されていると³⁹言える。

ここで再度「送孟東野序」における記述を見てみよう。「送孟東野序」では、均衡状態が失われた時に音が發せられるものとして、各時代の「善鳴者」を列擧する。形式的にそれを整理すると、それぞれの時代に、①ある人物が、②ある

媒體（ある種の言葉や文體、作品）によつて、③鳴る。という形をとつて、②は省略されることがあるが、書かれているものだけを並べれば、夔が「韶」、五子が「其歌」、莊周が「其荒唐之辭」、臧孫辰・孟軻・荀卿が「道」、楊朱・墨翟・管仲・晏嬰・老聃・申不害・韓非・慎到・田駢・鄒衍・尸佼・孫武・張儀・蘇秦の屬が「其術」、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀が「其所能」、そして孟郊が「其詩」となる。この中で唯一の例外は屈原であり、「楚大國也、其亡也以屈原鳴」と言われる。比較すれば明らかのように、①の人物に當たるものが無く、②の媒體に當たる項目に「屈原」が入っている。「以」が明記されている以上、人物に當たるものが倒置されているとは考えがたい。⁴⁰むしろ「大國である楚が減ぶとき」という「不平」の状況が前提となっている以上、亡國の臣としての屈原像は影響を與えているが、ここでの韓愈の意識として、「屈原」は實體を持った人物というよりも、屈原に假託される作品と一體化した存在として認識されているのではないだろうか。

では、韓愈は屈原の辭賦のどの要素を評價したのか。韓愈が明示的に述べる例は少ないが、「答崔立之書（崔立之に答うる書）」（卷一六）が一例としてあげられる。

誠使古之豪傑之士、若屈原孟軻司馬遷相如揚雄之徒、進于是選、必知其懷慙、乃不自進而已耳。（はたしてもし古代の傑出した士、たとえば屈原・孟軻・司馬遷・司馬相如・揚雄のような人を、この博學宏辭の試験に参加させたとしても、きっと彼らは恥ずかしかつて、自分から参加しようとしなはずです。）

現在の博學宏辭科が、實は名にそぐわぬ試験に墮してしまつてゐることをいう文であり、ここでの「豪傑之士」は、學問、特に文章についていうものである。

本章のはじめに見たように、屈原の文學への批判は、艷麗淫靡な修辭への批判と、儒家的倫理に照らしての倫理的批判の二點があつた。李華「揚州功曹蕭穎士文集序」の「君謂六經之後有屈原宋玉、文甚雄壯、而不能經」が示すように、修辭に對する評價は、前古文家の段階で既に弱まつていたと考えられる。韓愈の「豪傑之士」という評價も、李華や蕭穎士

と通じるものであり、屈原の辭賦の修辭については、問題のある艶麗さとは見なししていなかったことがわかる。残る問題は倫理的な評價、すなわち李華のいう「不能經」の方である。これまでの検討から考えれば、韓愈の場合は、屈原を「左遷された悲劇の忠臣」の人物像からいったん切り離し、文學自體を評價することで、その批判は棚上げされていたと推測される。⁽⁴¹⁾

ここで「棚上げ」というのは、批判を乗り越えたということではなく、儒家の「道」における基準とは異なる、「文」としての基準で評價したことを意味する。逆に言えば、屈原の辭賦や『莊子』の文章がいかにも高く評價されようとも、經書のような儒家の「道」を伝えるものとの間には、乗り越えがたい差違が存在していた。⁽⁴²⁾「莊騷」の用例の一つである、「山南鄭相公獎員外……」詩を改めて見てみよう。謙遜表現ではあり、自らの文を擬えるところに「莊屈」への親近感はいくらか垣間見えるものの、それは決して「訓」という道統にかなう文とはなり得ず、その權威の前では、「莊騷」も「俚言」の側に屬すものであった。

四 韓愈による莊子評價の特徴

「莊騷」の評價の重要な背景として、いわゆる「古文運動」における、先秦兩漢のテキストの再評價の影響を考慮する必要がある。古文運動のいま一人の雄である柳宗元においても、次のように「莊騷」併稱に似た用例が見られる。

「與楊京兆憑書（楊京兆憑に與うる書）」（卷三〇）

誠使博如莊周、哀如屈原、奧如孟軻、壯如李斯、峻如馬遷、富如相如、明如賈誼、專如揚雄、猶爲今之人、則世之高者至少矣。（はたして該博であること莊周のようで、哀切であること屈原のようで、奥深いこと孟軻のようで、勇壯なること李斯のようで、峻厳なること司馬遷のようで、豊富であること司馬相如のようで、明晰であること賈誼のようで、專一であること揚雄のような者であっても、今の世に生まれれば、世人の中で彼らを尊敬する者はごくわずかであるに違いない。）

「答韋中立論師道書（韋中立に答えて師道を論ずる書）」（卷三四）

參之穀梁氏以厲其氣、參之孟荀以暢其支、參之莊老以肆其端、參之國語以博其趣、參之離騷以致其幽、參之太史以著其潔。此吾所以旁推交通而以爲之文也。（『穀梁傳』を考へ合わせてその氣を研ぎ澄ませ、『孟子』『荀子』を考へ合わせてその枝葉を伸びやかにし、『莊子』『老子』を考へ合わせてその輪郭を自在にし、『國語』を考へ合わせてその面白みを廣々とさせ、『楚辭』を考へ合わせて奥深さを窮め、『史記』を考へ合わせてその潔癖さを明らかにする。これがそれぞれの要素を廣く追求し通じ合わせて文章を作る私のやり方です。）

「報袁君陳秀才避師名書（袁君陳秀才に報じて師名を避くる書）」（卷三四）

大都文以行爲本、在先誠其中。其外者當先讀六經、次論語・孟軻書、皆經言。左氏國語莊周屈原之辭、稍采取之。穀梁子太史公甚峻潔、可以出入。餘書俟文成異日討也。（全て文というのは行動を根本とし、まずはその内面を誠實にする。その外面については先に六經を読み、次に論語や孟子の書に進まねばならない。それはいずれも經書と同じ言葉だからである。『左氏傳』『國語』・莊周・屈原の文辭は、ある程度取り入れよ。『穀梁傳』や『史記』は非常に峻嚴高潔であり、適宜に取捨選擇して取り入れてよい。その他の書については文章が完成してから、日を改めて検討する。）

「與楊京兆憑書」は、元和五年（八一〇）冬ごろに書かれたとされ、友人の吳武陵が優れた文集を書くのに官界で認められないことを歎き、世の人が古えの人物を論評できても同時代の人物は評價できないことをいう。「答韋中立論師道書」は元和八年（八一三）に書かれた著名な文學論であり、文章作成に当たり、古典のどこに學ぶかを説いたもの。「報袁君陳秀才避師名書」は「答韋中立論師道書」から間もない時期に書かれ、後進に對し、文章のあり方を説いた文である。

どれも「古文」の作成のために参照すべき古えのテキストについて述べるものであり「與楊京兆憑書」と「報袁君陳秀才避師名書」では莊周と屈原が隣接して擧げられている。韓愈よりも分析的な説明であるが、元和年間の近い時期に柳宗元もまた『莊子』の文章に注目していたことがわかる。

古文家の中では、他に李翱「答朱載言書（朱載言に答うる書）」（『李文公集』巻六、四部叢刊本）にも「其讀屈原莊周也、如未嘗有六經也」（屈原や莊周の文章を讀むと、彼ら以前に六經が存在していなかったかのようなものである）という文が見える。これは、屈原や莊周はそれ以前の六經を参照したはずなのにまるでそうは思われなようなオリジナリティを有しているというところを、「易」「書」「詩」「春秋」と並べていうものである。⁽⁴³⁾

李翱と韓愈の間には直接の影響關係が存在する可能性が高いため措くとして、柳宗元もまた韓愈と並んで「莊騷」併稱を生んだ人物とみなせるかと言えば、それは難しいだろう。なぜならば、莊子への文學的評價において兩者には大きな差違があり、柳宗元にとっては、他と區別して莊子と屈原の二者が並び立つものではあり得なかつたと考えられるためである。列擧の中で「莊騷」のみが獨立して用いられる例がない一方、韓愈にはない「老莊」の併稱があるのは偶然ではあるまい。

第三章や註(36)で見たように、柳宗元は屈原に逐臣としての自らを重ねあわせ、極めて高く評價していた。一方で『莊子』の文章については、次のように否定的な評價が見える。

「送僧浩初序（僧浩初を送る序）」（巻二五）

退之好儒、未能過揚子。揚子之書於莊墨申韓、皆有取焉。浮圖者、反不及莊墨申韓之怪僻險賊耶。（韓退之は儒家を好む中でも、揚子が一番のお気に入りだ。だが揚子の書は、莊子・墨子・申不害・韓非子のいずれからも吸収しているところがある。佛教は、むしろ莊子・墨子・申不害・韓非子の奇怪で有害であるのには及ばないのではないか。）

「與楊誨之第二書（楊誨之に與うる第二書）」（巻三三）

其說韓愈處甚好。其他但用莊子國語文字太多、反曩正氣。果能遺是、則大善矣。（あなたが韓愈について述べられた箇所はまことにけっこうですが、その他については『莊子』と『國語』の文章を援用するところがあまりに多く、かえって文章の正しい氣を亂しています。もしそれを捨てることができれば、すばらしいものになりましょう。）

「送僧浩初序」は、韓愈からの佛教批判に對して、韓愈の好む揚雄を持ち出して擁護したものである。『莊子』は墨子・申不害・韓非子と竝べて「怪僻險賊」とされている。「與楊誨之第二書」では、『國語』と竝べて批判されていることに注意したい。柳宗元の『國語』批判については既に研究が蓄積されているが、以下のような批判を参考にすることができる。⁴⁵

〔非國語序〕（卷四四）

左氏國語、其文深閎傑異、固世之所耽嗜而不可已也、而其說多誣淫、不概於聖。（左氏の『國語』は、その文章は深く廣く傑出していて、世の人々が耽溺して止まらぬものであるが、その内容はでたらめで亂れており、聖人の教えに叶わないものである。）

〔與呂道州溫論非國語書（呂道州溫に與えて非國語を論ずる書）〕（卷三二）

嘗讀國語、病其文勝而言尫、好詭以反倫、其道舛逆。（以前『國語』を讀んだところ、その文飾が勝るあまり言葉が雜駁に亂れ、奇怪を好むあまり人倫に反し、その道があるべき道に背いていることが憂慮された。）

〔答吳武陵論非國語書（吳武陵に答えて非國語を論ずる書）〕（卷三一）

夫爲一書、務富文采、不顧事實、而益之以誣怪、張之以闕誕。（文章を作るに當たって、文彩を富ませることにばかり努め、事實を顧みず、ありもしない奇怪なことで大きくみせ、ただ廣いでたらめによって誇張する。）

「好詭」や「不顧事實」「誣怪」「闕誕」など、ここで『國語』に向けられた批判的評語が『莊子』にも該當しうることは、「怪僻險賊」との類似性や、第二章に挙げた『莊子』天下篇の評語「以謬悠之說、荒唐之言、无端崖之辭」「其書雖瓌璋而連犴无傷也。其辭雖參差而詼詭可觀」を参照すれば、容易に想像できる。「與楊誨之第二書」での莊子と『國語』の併稱はこのような要素の共通性に基づくと推測できる。

以上の柳宗元の評價は、韓愈が『莊子』の文章のどの部分・要素に注目していたのかという問題について大きな示唆を與えてくれる。この問題に關する數少ない韓愈自身の言及は、「送孟東野序」の「莊周以其荒唐之辭鳴」である。この

「荒唐之辭」が『莊子』天下篇の評語に出るのは明らかだが、「荒唐」はとめどなく廣がるさまを表す疊韻の語で、秩序だったさまの對極として、否定的な意味で用いられることが多い。⁴⁷⁾

その他に參考になるのは、「崔十六少府攝伊陽以詩及書見投因酬三十韻」(崔十六少府の伊陽を攝して詩及び書を以て投ぜらるる因りて酬め三十韻)(卷四)である。この詩では、崔十六という舊知の人物から届いた詩と手紙について次のように述べる。

35 寄詩雜詠俳

詩を寄するに詠俳を雜え

36 有類說鵬鷄

鵬鷄ほうあんを説くに類する有り

37 上言酒味酸

上には言う 酒味 酸して

38 冬衣竟未撰

冬衣 竟に未だ撰つらぬかず (着ない)と

39 下言人吏稀

下には言う 人吏稀にして

40 惟足彪與戯

惟だ彪と戯ま(虎の一種)と足れりと

41 又言致猪鹿

又た言う 猪鹿を致さんと

42 此語乃善幻

此の語 乃ち幻を善くす

第36句の「鵬鷄」は『莊子』逍遙遊篇の大鵬と斥鷄で、偉大なものと卑賤なものとの兩極端をいい、詩では出世のスピードの違いを喩えることも多い。⁴⁸⁾ただ第42句に至るその内容を見ると、ここでは個別の比喩の使用を指して言うのではなく、崔氏の文章全體について『莊子』との類似性を言うと考えるべきであろう。赴任地は人跡乏しく酒も衣もなかなか手に入らないと嘆きながらも、猛獸ばかりいるのを逆手にとつて猪や鹿の肉を届けようとうそぶく崔氏に對し、韓愈は「乃ち幻を善くす」、何ともうまく人を煙に巻くものである、と總括している。

贈答の詩であることから、この言葉に諧謔はあつても批判はないはずである。「幻」も「荒唐」と同じく通常は貶義が勝る語であるが、ここでは褒め言葉として用いられている。第36句で言うように、崔氏の詩が『莊子』に似るといふな

らば、この「詠俳を雑え」「幻を善くす」は、そのまま『莊子』の文學性に對する評價ともつながるものである。

韓愈における逸脱への志向が、時に「怪」のように一般には否定的に用いられる語すら肯定するに至ることは、既に指摘されている通りである。⁽⁴⁹⁾ 韓愈が『莊子』の「荒唐」に注目したことは、韓愈の逸脱への志向が莊子評價において重要な役割を果たしていたことを示す。⁽⁵⁰⁾ 莊子の持つ規範からの逸脱の要素を肯定するか否かが、莊子に對する柳宗元との差違を生みだしたと考えられる。

おわりに

韓愈は、もともと隱逸者・思想家として扱われていた莊子を、明確に文學性を持った作者として捉えた。そして屈原についても倫理性を強く帯びた理想の逐臣という人物像とは距離を置いてその作品を捉えた。このように、文章の「作者」としての面のみに注目し、「古文」の模範として位置づけることによって、両者は並び立つことになり、「莊騷」という併稱が生まれたと考えられる。

韓愈の莊子評價は、主にその過剰さや逸脱に向けられていたと考えられる。現在の目からみれば、『莊子』の文章に對する評價としては、むしろ一般的で平凡なものに見えるかもしれない。しかし第二章でみたように、そもそも韓愈以前には『莊子』を文章として評價した例が少なく、郭象序や成玄英序、『文心雕龍』などの数少ない例にしても、その過剰さや逸脱が評價されているとは言いがたかった。そのような中で、韓愈が『莊子』天下篇にまで遡り、肯定的に「荒唐の辭」を評價することで莊子の價值を再発見したことは、大きな意義を持つものであったと言える。「莊騷」の併稱が韓愈以來習用の語となったように、晩唐以降現在にまで至る莊子評價において、この韓愈の見方が影響を及ぼしている可能性もあると考えられる。

残る問題として、韓愈の逸脱への志向は、莊子と併稱される屈原・『楚辭』への評價とはどう關わるのかという課題が

ある。また文學研究の立場からは、このような新しい「莊騷」評價が、韓愈の實作にどう反映されているのかを検討すべきであろう。これらについては稿を改めて論じることとしたい。

附記：本研究はJSPS科研費17K02638の助成を受けたものである。また各詩の解釋に当たっては、註(7)に挙げた『韓愈詩譯注』作成のための研究會である「昌黎會」において、參加者の先生方の玉稿及びご意見に頼るところが多い。ここに厚く感謝する次第である。

註

- (1) 「騷」は、文字通りには「離騷」を指すが、ここでは『文選』の分類における「騷體」や『文心雕龍』辨騷篇のように、『楚辭』の諸篇、特にその中の屈原作品と傳えられるもの(『漢書』藝文志の「屈原賦二十五篇」)を指している。
- (2) 陸游「雨霰作雪不成大風散雲月色皎然(雨霰 雪と作りて大風を成さず、雲を散じて月色皎然たり)」（『劍南詩稿』卷四九、『陸遊全集校注』、浙江古籍出版社、二〇一五年）の自注に「韓文公以騷配莊、古人論文所未嘗及也」（韓文公が「騷」を「莊」に並べたのは、それまで文章について論じた古えの人々が誰も思いつかなかったものである）という。なお中唐以前の例として『史通』雜說下（浦起龍『史通通釋』、上海古籍出版社、一九七八年）には「嵇康撰高士傳、取莊子・楚辭二漁父事、合成一篇」（嵇康は『高士傳』を著すに当たり、『莊子』と『楚辭』それぞれの漁父の故事を取り、合わせて一篇とした）という。但し本論で論ずる併稱とは性質が異なるだろう。
- (3) 李生龍「論韓愈莊騷并舉之意義」（『周口師範學院學報』第二八卷第一期、二〇一一年）が、韓愈以降の「莊騷」併稱の影響について整理している。
- (4) 明の遺民における「莊騷」合一を示す代表的な文章・著書としては、陳子龍「譚子莊騷二學序」（『安雅堂稿』卷四）や錢澄之「莊屈合詁」などがある。謝明陽『明遺民的莊子定位論題』（國立臺灣大學出版委員會、二〇一一年）第四章を参照。
- (5) 註(4)に挙げた陳子龍・錢澄之も、兩者の相違性から出發し、それを止揚することで兩者の合一を目指している。
- (6) 「莊騷」研究の概観としては、黃巧紅「近三十年莊屈比

較研究綜述」(漳州師範學院學報(哲學社會科學版))總第四輯、二〇一二年第一期)を参照。本論に近い議論としては李生龍註(3)前掲論文があるが、韓愈におけるこの併稱の誕生の理由については、韓愈自身に言及がなく眞意は不明として、儒家の「文統」を打ち立てるため「莊騷」を含む「三代兩漢の書」を重視したこととの關聯を指摘するにとどまる。

(7) 韓愈の詩文の引用は、南宋・廖莹中刊刻の世綵堂本『昌黎先生集』を底本とし、その巻数を示した。また詩には句数を示した。解釋に際しては、屈守元・常思春主編『韓愈全集校注』全五冊(四川大學出版社、一九九六年)、閻琦校注『韓昌黎文集注釋』上下冊(三秦出版社、二〇〇四年)等を参照した。日本語の譯注としては、川合康三・綠川英樹・好川聰編『韓愈詩譯注』(研文出版、二〇一五年・二〇一七年)第一冊・第二冊、清水茂譯『韓愈』I・II(世界古典文學全集三〇、筑摩書房、一九八七・一九八八年)を参照した。それぞれの詩文の繫年は、主に『韓愈全集校注』を参照した。

(8) 陸德明『經典釋文』序錄(通志堂本)にも、この郭象序を踏まえた「莊生宏才命世、辭趣華深(言葉の味わいは華やかで深く)、正言若反」という評價が見える。

(9) 六朝期における諸子の文學的評價の低さを示す代表的な例として、昭明太子「文選序」の「老莊之作、管孟之流、蓋以立意爲宗、不以能文爲本、今之所撰、又以略諸」(『老子』「莊子」の作や『管子』「孟子」の類いは、主張をうち

立てることを主眼とし、優れた文章を作ることを中心としていないので、この度の編纂に当たっては、これらも省くことにした)を参照。また『世說新語』には『莊子』に言及する章が数多くあるが、それらにおいても概ね取りあげられているのは『莊子』の思想面である。方勇『莊子纂要』(學苑出版社、二〇一二年)附録「莊子詩文序跋彙輯」を参照。

(10) 唐代の文論については、郭紹虞主編『中國歷代文論選』第二冊(上海古籍出版社、一九七九年)、羅聯添主編『隋唐五代文學批評資料彙編』(成文出版社、一九七八年)を参照。本論では合わせて、京都大學中國文學研究室編『唐代の文論』(研文出版、二〇一〇年)を参照した。

(11) 裴迪の唱和詩「輞川集二十首 漆園」(『全唐詩』一二九)でも「今日漆園游、還同莊叟樂」(今日漆園に遊び、還た莊叟の楽しみを同じくす)と隱逸者としての楽しみが歌われる。

(12) 墓主の王湛の残した著作を稱える。莊周は刻意篇の論說の語、史佚は『左傳』襄公二十四年の立德、立功、立言を並べて「此之謂不朽」という記事に基づく。

(13) 「鸚鵡」「培風連海」は『莊子』逍遙遊篇冒頭の寓話を踏まえる。「龍馬」は河圖洛書を指し、「乾坤」と同じく『易』が示すような天地の法則をいう。解釋については姜漢椿『唐摭言校注』(上海社會科學出版社、二〇〇三年)九五頁及び永田知之「唐代の文學理論——「復古」と「創新」」(京都大學學術出版會、二〇一五年)四六頁を参照し

た。

- (14) 「痾僂之志」は『莊子』達生篇の仲尼・痾僂者の寓話「螳螂之捕」は『莊子』山木篇の莊周・蘭且の寓話に基づく。人物をもとの寓話と入れ替えるのは修辭上の工夫であろう。

- (15) 「稊稗」は知北遊篇の東郭子・莊子問答で「道」の遍在を言う時に挙げる例の一つ。

- (16) 李嘉祐の詩には、「此公深入道門」（この韋公は道家の門下に深く入った）と自注がある。韋司直が入山する際に送ったものであり、「能文」は韋司直の文人としての要素をいい、「莊叟」と繋がるのは「證道」の方であると考えられる。

- (17) 盧藏用の文では、莊周が登場しない鲲鹏の寓話を「莊生」とともに挙げる點で例外的だが、これは當該の寓話が『莊子』の代名詞として浸透していたためであろう。唐詩には「莊子」の書を指して「逍遙篇」と呼稱する例も複数見える。

- (18) 寓話の概要は以下の通り。長雨が續き、子輿は友人の子桑が病いに倒れてはいないかと、食べ物を手を訪れた。すると子桑はいかにも苦しげに歌をうたっている。そのわけを尋ねると、子桑は「自分をここまで困らせる者は何かと考えてみても、父母のはずもなく、萬物に平等な天や地のはずもない。ちっとも分らない。だがこんな目にあっているのは運命なのだ」と慨嘆した。

- (19) 柳宗元の引用は『柳宗元集』（中華書局、一九七九年）

を底本とする。「與李翰林建書」（卷三〇）「莊周言、逍遙藿者、聞人足音、則覺然喜。」永州左遷中に友達からの手紙を受け取った喜びをいう。

- (20) 「進士策問十三首」や「改葬服議」（ともに卷一四）において策問の問題文や議論の論證で引かれるものは除く。また「請選玄宗廟議」（外集卷一）には『荀子』が引かれるが、廟制の根據の一つとしてであり、またこの文自體が韓愈の作か疑わしい。揚雄の引用は「上襄陽于相公書」（卷一五）、「與馮宿論文書」（卷一七）、「與孟尚書書」（卷一八）、「送浮屠文暢師序」（卷二〇）に見える。

- (21) 陳寅恪「論韓愈」（『陳寅恪集 金明館叢稿初編』、生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇一年）参照。

- (22) この點は松本肇『唐代文學の視點』（研文出版、二〇〇六年）一八・一九頁が早くに指摘している。松本氏は「送王秀才序」前半部での子夏の學統との結合に基づき、韓愈が莊子を「否定し去っていな」かったこと、更には「送孟東野序」を参照して「莊子における怪奇的な表現こそが、韓愈の關心を惹いた」可能性を指摘している。「送王秀才序」は、先の引用部分のように莊子を含めた諸子批判を含み、全體としては『孟子』の價值が突出することを主張する文章で、子夏の學統の結合のみをもって莊子への肯定的評價の例とすることはできないと考えるが、以上の指摘については同意できる。

- (23) 李誠・熊良智主編『楚辭評論集覽』（楚辭學文庫第二卷、湖北教育出版社、二〇〇三年）は歴代の『楚辭』評價を網

羅的にまとめている。本論ではその他に特に蔣方「唐代屈騷接受史簡論」(『中國韻文學刊』第十九卷第四期、二〇〇五年)を参照し、初唐の状況については古川末喜「初唐四傑の文學思想」(『中國文學論集』第八號、一九七九年)、同「初唐歴史家の文學思想——太宗期編纂の前代史文苑傳序を中心に——」(『中國文學論集』第九號、一九八〇年)を参照した。

(24) 王逸「楚辭章句序」(洪興祖「楚辭補注」、中華書局、二〇〇〇年による)を参照。「屈原履忠被讟、憂悲愁思、獨依詩人之義而作離騷、上以諷諫、下以自慰」(屈原は忠義を踏み行ったが讟言にあい、憂い悲しんで、ひとり『詩經』の作者達の義に依據して「離騷」を作り、君主に對してはそれによって諷諫し、自らに對してはそれによって慰めようとした)。

(25) 王逸「楚辭章句序」では班固らの批判を「露才揚己、怨刺其上、強非其人」とまとめる。

(26) 『法言』吾子(『法言義疏』、中華書局、一九九六年)「詩人之賦麗以則、辭人之賦麗以淫」(『詩經』の作者のうたは美しく道理に合うが、辭賦の作者の賦は美しいものの度が過ぎる)。この評價は景差・唐勒・宋玉・枚乘らへのものであるが、同じく『法言』吾子に辭賦を「彫蟲篆刻」(蟲の彫刻を施すような小手先の遊戯)とするのと併せて、屈原も含めた辭賦一般への批判的評價として定着する。

(27) 『周書』王褒・庾信傳論は第二章参照。『北齊書』文苑傳序では、子游・子夏・顔回について「屈宋所以後塵、卿雲

未能駮簡(屈・宋はすぐ後に續くものであり、司馬相如・揚雄は文を綴ることを止められなかった)」と肯定的に評價される。

(28) 但し文人全體を見れば、上古の理想的な文學として『楚辭』を受容するのが一般的であったことは忘れてはならない。李白も杜甫もその權威を素直に受け入れている。

(29) 『文苑英華』は「君以爲六州之俊」に作るが、「二作」により改めた。

(30) 尚永亮「貶謫文化與貶謫文學——以中唐元和五大詩人之貶及其創作爲中心」(蘭州大學出版社、二〇〇四年)は韓愈・柳宗元・劉禹錫・白居易・元稹を、貶謫を受けた「五大詩人」として論じる。

(31) 溺死のことを「魚の腹に葬る」という。『楚辭』漁父に、屈原が世俗の塵埃に身を汚すよりは「寧赴湘流、葬於江魚之腹中」(むしろ湘水に赴いて魚の腹の中に葬られよう)と言ったのを踏まえた表現。

(32) 「角飯」はちまき。屈原への供物として水に投じられた。屈原が汨羅に身を投げたとされる五月五日に、竹筒に米を詰めたものを川に投じて祭る習慣があった(『太平御覽』卷八五一などに引く『續齊諧記』)。

(33) 陽山からの復路に詠まれた「潭州泊船呈諸公(潭州に船を泊して諸公に呈す)」(遺文)では「主人看使範、客子讀離騷(主人 使範を看、客子 離騷を讀む)」という。これも五言律詩であり、この對句はこの地の主人の勤勉さとその客の風雅を稱えるものであって、實際の詩の性質が強い。

(34) 劉向『列女傳』卷一有虞二妃を參照。

(35) 45 楚些待誰申 楚些 誰の弔うを待たん

46 賈辭緘恨投 賈辭 恨みを緘じて投ず

47 翳明不可曉 明を翳いて曉るべからず

48 魂安所求 魂を祀して安くにか求むる所ぞ

「楚些」は楚の歌を指す。45句と46句はほぼ「屈賈」の對と言える。

(36) 柳宗元については「弔屈原文」での評價や、永州左遷中に十篇に及ぶ「騷」體の文を作ったことなどに端的に見ることが出来る。柳宗元と屈原の辭賦との關係については新

海一『柳文研究序説』(汲古書院、一九八七年) 第一篇、小野四平『韓愈と柳宗元——唐代古文研究序説——』

(汲古書院、一九九五年) 第三章Iを參照。劉禹錫については、近年の研究としては、鄭眞先・戴偉華「論劉禹錫接受屈賦之表現及其因緣」(『劉禹錫研究』第一輯、暨南大學出版社、二〇一七年)を參照。

(37) 尙永亮註(30) 前掲書第四章第四節「元和詩人對屈原模式的繼承和突破」では、逐臣の柳宗元・劉禹錫が從來の逐臣としての屈原モデルを強固に受け継いだのに對し、白居易は從來の屈原モデルとは異なる受容をしたと論じられるが、韓愈には觸れられることはない。

(38) 例えば「調張籍(張籍を調る)」(卷五)に「李杜文章在、光焰萬丈長」(李杜文章在り、光焰萬丈長し)と、いう。

(39) 錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』(上海古籍出版社、一九九八年)三七一頁が引く所によれば、方世學や魏本の引く韓

醇が第16句の「聖」を文字通りの意味にとるのに對し、方成珪・程學恂は酒の意であるとして反論する。ところが最終的な解釋は四者みな異なっている。このような解釋の分裂は、ここでの屈原の取り上げ方が類型を大きく逸脱するものであることを傍證しよう。孫昌武『唐代古文運動通論』(百花文藝出版社、一九八四年)一三四頁では舊注が屈原の行動への評價として讀もうとするのに對して「但今天看來、他還是特別肯定屈原始的『文辭』的」(今日の目から見れば、韓愈はやはり屈原の「文辭」をとりわけ評價しているのである)と述べる。

(40) 『文苑英華』卷七三二のみ「屈原以鳴」に作るが、宋代の別集類は全て底本と同じ。

(41) 蔣方註(23) 前掲論文でも、韓・柳による肯定は「不是基于道德立場、而是從文學自身性質出發」(道德的立場に基づくのではなく、文學自體の性質から出發した)ことによるという(六一頁)。但し本論で見たように韓・柳兩者の屈原受容は異なる點も多い。

(42) 陳弱水『唐代文士與中國思想的轉型(增訂本)』(臺大出版中心、二〇一六年)五九頁・六二頁では、韓愈・柳宗元の古文運動の特徴として、前古文学家たちでは一體化していた文章作成と儒家の復興との分離を指摘する。但し韓愈については具體例を挙げていない。また孫昌武註(39) 前掲書一三四頁では、「送孟東野序」「上兵部李侍郎書」の文學觀について「道統」の説とは全く別物(全是兩碼事)と、いう。

- (43) この文章の前段は「創意造言、皆不相師。故其讀春秋也、如未嘗有詩也。其讀詩也、如未嘗有易。其讀易也、如未嘗有書也。」という。
- (44) 「答朱載言書」の成立時期について、「李翱年譜」(羅聯添『唐代詩文六家年譜』、學海出版社、一九八六年)五一―九頁では、「答李翊書」の書かれた貞元十七年(八〇二)以降と指摘するにとどまるが、末岡實「李翱の文學觀について」(『古田教授退官記念中國文學語學論集』、古田敬一教授退官記念事業會、一九八五年)三八五頁は韓愈の死(八一四年)の前後と推測する。
- (45) 松本肇『柳宗元研究』(創文社、二〇〇〇年)第四編第一章を参照。
- (46) 「答吳武陵論非國語書」の例は、文章一般に對する戒めだが、この文の主題から、『國語』が特に意識されていることは明らかと言える。
- (47) 例えば顧況「陰陽不測之謂神論」では名づけや墓の場所に決めに術數的判斷を取り込むことを「此莊惠以荒唐舛駁之論」(これは莊周や惠施の「荒唐」「舛駁」の論によるものである)と批判する。「舛駁」も『莊子』天下篇での惠施への評語。なお韓愈「桃源圖」詩(卷三)には「神仙有無何渺茫、桃源之說誠荒唐(神仙の有無 何ぞ渺茫たる、桃源の説 誠に荒唐たり)」といい、神仙や桃源郷の傳説に對する迷信批判として理解されているが、詩全體として諷刺の色合いは薄く、この「荒唐」も貶義ではないと思われる。
- (48) 詩では出世の遲速を喩えることが多いというのは齋藤茂先生のご教示による。
- (49) 川合康三『終南山の變容——中唐文學論集』(研文出版、二〇〇〇年)一一四頁から一八九頁を参照。一六〇頁では、韓愈が自身の文學に奇怪な要素を含むことを認めていた例として「上兵部李侍郎書」の「環怪之言」、「上宰相書」の「感激怨懟奇怪之辭」を示す。
- (50) 註(22)に示したように、松本肇氏が既に簡略にはあるが同様の指摘をされている。

THE BIRTH OF “ZHUANG-SAO” : HAN YU’S RECEPTION OF THE *ZHUANGZI* AS LITERATURE

SUZUKI Tatsuaki

The term “Zhuang-Sao” 莊騷 is a joint designation for the *Zhuangzi* 莊子 and the poetry of Qu Yuan 屈原. This designation is said to have been coined by Han Yu 韓愈 (768–824) of the Tang and subsequently became a concept widely used in literary criticism and elsewhere, but it has not been fully shown why Han Yu used this designation. This paper discusses the reasons behind the birth of the joint designation “Zhuang-Sao” and its significance through an examination of the distinctive features of Han Yu’s reception of *Zhuangzi* and Qu Yuan.

The ideas and allegories of the *Zhuangzi* had since earlier times had an influence on many works of literature, but the person *Zhuangzi* had been regarded as a recluse and a Taoist, and assessments of the actual writing style employed in the *Zhuangzi* had been quite limited, and it had not been properly positioned in the history of literature. In contrast, Han Yu viewed *Zhuangzi* as a writer and evaluated his book from a literary perspective.

Qu Yuan is a typical example of a patriotic minister who was banished south of the Yangtze River, and Liu Zongyuan 柳宗元 and Liu Yuxi 劉禹錫 responded to his writings by superimposing their own circumstances onto those of Qu Yuan. Han Yu, too, experienced banishment and wrote about Qu Yuan in his poems, but there is little sense of self-projection when compared with Liu Zongyuan and Liu Yuxi. It can be surmised, rather, that in assessing the poetry of Qu Yuan, Han Yu distanced himself from the image of Qu Yuan as a banished loyal minister.

From this consideration of reception of *Zhuangzi* and Qu Yuan by Han Yu, we can reasonably conclude that he created the joint designation “Zhuang-Sao” by evaluating the *Zhuangzi* and Qu Yuan’s poetry from a literary perspective that was divorced from intellectual thought, or spiritual and moral concerns. At the same time, this also meant that “Zhuang-Sao” could not rank with writings that conveyed the Confucian Tao.

Behind the birth of this joint designation, there lay the attempts to create “ancient prose” (*guwen* 古文) in the ancient prose movement, and around the same time Liu Zongyuan was also paying attention to the literary aspects of the *Zhuangzi*, though he did not evaluate it as highly as Han Yu did. It is likely that this difference arose because Han Yu held in high regard the deviation from norms (or

“absurd language” [*huangtang zhi yan* 荒唐之言]) to be seen in the *Zhuangzi*'s modes of expression, whereas Liu Zongyuan reacted strongly against this.

CONCEPTS OF “CHINA” AS SEEN FROM THAT HELD BY THE JIANGNAN LITERATI IN THE YUAN PERIOD: CONSIDERED IN TERMS OF THE MEANING OF *HUNYI NANBEI* 混一南北

SAKURAI Satomi

Many books and articles that address the question, what is “China” have been published recently from various standpoints in the disciplines of geography, the history of thought, and history. And one sees there the opinion that “China” or “Great China” came into existence during the Mongol, or Yuan, period. But previous research has not dealt much with what the concept of “China” meant in the Mongol-Yuan period. This paper analyzes the way two terms were used to answer the question, how people, especially the Jiangnan literati, recognized “China” in the Yuan period.

As regards the first term “China” 中國, the word “China” did not simply contain traditional, cultural and geographical meanings, but also meant the territory under the control of the central court during the Liao, Song and Jin dynasties. The Five Dynasties, Liao and Jin governments perceived that control of the central plain 中原 region was integral to “China,” but, in contrast, the Southern Song dynasty, which was unable to control the central plain, emphasized its traditions and culture as “China,” in order to bolster its claim to legitimacy to be recognized as “China.” In the first section, I compare examples of passages from the *Yuanshi* 元史 to those in earlier and later authorized histories. There are relatively few examples of the use of “China” in the *Yuanshi*. The *Yuanshi* seems to avoid using “China” as the opposite of *yidi* 夷狄. In addition, I examine examples in historical records, mainly in the anthologies of Jiangnan literati, and indicate that usage of “China” during the Yuan period differed very little from that of the Southern Song.

In the second section, I analyze the term “*hunyi*” 混一. “*Hunyi*” came into fashion during this period, and was used symbolically as a word to emphasize great territorial expanse. I mainly examine the meaning of the phrase “*huiyi nanbei*” 混一南北 that meant to unify south and north. The south and north that were joined meant for the most part the south and north of traditional “China,” or China proper. Next, I examine the differences among six maps which are titled either *Huayi*